表　　題	キリスト教葬儀の基本的な流れ		
著　　者	髙見 晴彦		
作 成 日	2019年6月25日	最終更新	2023年3月26日

日本基督教団 群馬地区教師会研修会

2019年6月25･26日 音羽倶楽部(宿泊研修施設)

2023年3月26日 追記

皆さん初めまして。若干名、存じ上げている先生方はお久しぶりでございます。兵庫県西宮市でプロテスタント専門の葬儀社を営んでおります、株式会社シャロームの高見晴彦と申します。川上先生が神戸におられた時にお世話になっておりまして、このたびお声がけいただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

▼本会の趣旨

さて、今回いただいておりますお題は「キリスト教葬儀の基本的な流れ」であります。もちろん、キリスト教葬儀と申しましても、お話しするのは今日の日本におけるプロテスタント葬儀の様式が中心となります。また私自身、先生方のように神学を修めた者ではございませんので、あくまで実務的な側面からの説明となることを予めお断りしておきます。

ところで、皆さん葬儀の際には何らかの式文集を参考にされていると思います。教団の先生方であれば、こちらの1959年初版の口語式文か、あるいはこちらの2006年初版の式文（試用版）、これは以後、便宜上、新式文と呼びますが、このいずれかをお使いである場合が多いでしょう。そうすると、葬儀諸式の基本的な順序はこれらの式文集に書かれている通りでありますので、改めてキリスト教葬儀の基本的な流れなどといっても、話すことがどれだけあるのだろうと思われる方もいらっしゃるかもしれません。では、なぜわざわざこのようなお題をいただいたのか、それは思いますに、いざ葬儀の実務にあたって生じる疑問や課題の多くは、これら式文の外や、いわゆる行間にあるから、でありましょう。

例えばあるとき、ご依頼があって私が病院に伺うと、最近赴任してこられたばかりの先生が、「私、これまで一人で葬儀を始めから終わりまでしたことなくて、判らないことばかりなのでいろいろ教えてください」と仰います。

私：「もちろん、できる限りお手伝いいたします。早速ですが、これからお祈りされますか？」

牧：「はい、します」

私：「式文集はお持ちですか？」

牧：「はい、持ってます」

私：「では、どうぞお願いいたします」

牧：「わかりました」…（前見る）…（式文見る）…（前見る）…（式文見る）

私：「あの、どうされましたか？何かお困りですか？」

牧：「す、すみません。私はどこに立ってお祈りをすればいいでしょうか？」

なんとも笑い話のようでもありますが、当の本人にとっては至って切実な問いかけだったわけです。類型ですと、和室で式をするときに、「私は立ってしたほうがいいですか、座ってしたほうがいいですか？」などと訊かれることも、長年この仕事をしているとそれこそ一度や二度ではありません。つまり、葬儀諸式の順序やお祈りの文句は式文集によって判っていても、現場の実情はなかなか想像もつかないようなところがあり、いざその場に立って初めて、自分は何が判らないかが判る、というところから始まる可能性もあるわけです。

また、ベテランの先生方であれば、このようにどこへ立つべきかなどという疑問は、もはや遠く通り過ぎてしまった事柄でありましょう。その場に行けば、特に考える必要もなく、それまでのご経験から、ご自身のベストポジションにお立ちになるはずです。しかしその時、仮に教師に成り立ての方から、「先生、そこに立つのはどうしてですか？」と訊ねられたら、昨今ＮＨＫで人気の「チコちゃんに叱られる」のように、「ん？なんで？」と答えに困ることもあるかもしません。

ですからこの際、葬儀の流れを改めて追いながら、現場で出会うかもしれない「なんで？」に対して言語化を試みることによって、皆さんの中で葬儀のノウハウを共有していこうというのうが本会の趣旨であろうと、ご依頼の際には拝察いたしました。

そのため、今回は全体としてはこれらの式文集を参考に葬儀諸式の流れを追う形をとりますが、その合間合間に挟み込む四方山話のほうが実は本体であります。そういったことからすると、タイトルも「キリスト教葬儀の基本的な流れ」なんていうものではなく、どこかで見た新書みたいに、「葬儀は行間が８割」とかにすれば良かったかもしれませんね。

それでは進めていきたいと思います。お手元の資料(末尾に添付、以下同じ)の１枚目をご覧ください。これは一般的な葬儀諸式全体の流れを示したもので、左端の丸数字は新式文の中の番号と対応しています。もちろん、新式文の解説にもあるように、すべての葬儀がこの順序によって行われるというものではありませんし、一部が省略されることもあります。そういった変形パターンの中でも代表的なものについては、それぞれの項の中で簡単に触れるつもりです。

／／教会員が病院で亡くなる／／

さて、葬儀諸式以前の話として、葬儀は何によって始まるか。それはもちろん、ある人の死ですね。この亡くなったかたについて、分類上はいくつもの属性を見いだすことができますが、ここでは大きくふたつ、「誰が」と「どこで」という点を挙げています。

▼教会員以外が亡くなった場合

まず「誰が」という点については、教会葬儀で比較的多数であるのは「その教会の教会員が」ということになるでしょう。亡くなったかたが教会員であるにもかかわらず、あえて教会の意思として葬儀を引き受けない、というケースはずいぶんと限定されていると思われますので、わざわざここでご説明するには及びません。しかし、変化の例として挙げたその逆、「教会員以外が」亡くなった場合に、その葬儀をどうするかということについては、教会によって存外幅広い温度差があるのが実情です。資料の後ろから2枚目のページをご覧ください。

これは「教会として、どこまでの範囲のかたの葬儀を引き受けるか」ということについて、比較的よく聞かれる区分を、おおよそ狭い方から順に並べてみたものです。実際にはもっと詳細な規定、例えばＣの場合にはＤでもなければならない、などということもありますが、何にせよ大切なことは、いざ誰かが亡くなった時ではなく、日頃から教会の中で、このことについて方針を共有しておくべきだ、ということでしょう。

また併せて、その下に記してありますような事柄についても、できれば教会内で話し合っておくべきです。なお一番下、「葬儀社等から司式者やオルガニストのみの派遣要請があった場合はどう対応するか」というのは、ご経験がないと少し判りにくいかもしれませんが、葬儀社がご遺族から直接葬儀の依頼を受けて、プロテスタントの様式で行いたいという希望なのだけれど、亡くなったかたが洗礼を受けていないとか、所属教会と疎遠であるなどの理由で、葬儀を依頼する教会が自然には決まらない。そこで近隣の教会に依頼して、牧師だけ、あるいは奏楽者と二人だけなど、礼拝の奉仕者だけが来て葬儀をしてくれないか、と言われた時に、それを教会として引き受けるかどうか、ということです。

▼病院以外で亡くなった場合

もうひとつ、亡くなる場所については、現在の日本では病院が圧倒的多数となっています。厚生労働省の統計によると、ピークだった2005年頃には8割、現在は少し減っていますが7割強のかたが病院で亡くなっています。またピーク時との差についても、老健施設や特

養などとちょうど入れ替わっているというような状況です。さて、ここでも変化として挙げているのは単に多数の逆、「病院以外で」亡くなる場合ですが、ここで問題としたいのは、かかりつけ医のない自宅死亡や路上死亡、つまり通常の死亡診断を行う医師がいない状況ですので、老健施設や特養などは病院死亡と同じと考えて頂いて差し支えありません。

事件、事故、その他継続的な診療を受けておらずに亡くなった場合、その遺体は警察の検案を受けることになります。状況にもよりますが、警察署等への移送や、死因の確認のための解剖が伴うケースもあります。こうしたケースでは、後にお話しいたします葬儀諸式の前半が、大きく異なる動きをする場合や省略せざるを得ない場合が生じます。例えば死後時間が経って遺体が発見されたような時には、遺体の腐敗が激しく解剖を受ける場所で棺に納めておかなければとても搬送できない、というようなケースもありますが、その場合には①の「死亡直後に行われる祈り」や②の「遺体を棺に納めるときに行われる式」をその場所で行うことは現実的ではありません。また、棺に収めていたとしても死臭の程度によっては教会で諸式をすることもままならず、④も飛ばして③の後すぐに⑥、改めて⑤、などということも考えられるわけです。個別の事情をここでいちいち取り上げるわけにはいきませんが、式文集の流れから大きく外れる場合もある、ということだけはご理解いただければと思います。

▼死の呼び名

ところで、プロテスタントの信徒の死を、熟語としてはどう表現するでしょう。法律上の用語などでは「死亡」、そして一般的に用いられる語としては「死去」「逝去」「永眠」など、さらに各々の宗教的な用語として、例えば仏教では「往生」、神道では「帰幽」、カトリックでは「帰天」、ではプロテスタントでは？というと、現在比較的多く聞かれるのは「召天」ですね。「天に召される」という意味で、キリストが「天に昇った」「昇天」とは字が違う、などという説明がよく聞かれるところです。

ところがこの語、プロテスタントなら誰でも受け入れられる表現なのかというと、実はそうではありません。例えばプロテスタント葬儀実務の参考書としてよく知られている、1974年初版の『死と葬儀』という本がありますが、この本を中心となって編集した山(やま)本(もと)尚(なお)忠(ただ)という先生も、本書の中で他の用語も挙げつつ、《「召天」という語も教会では適当でない》という意味のことを述べています*1。残念ながらその理由についてはここでは端的に示されておりませんが、文脈としてはご自身の神学的理解からす

ると馴染まない、ということのようです。同じように、個人としてではなく教派としてこの語を用いないとしているのは、私が承知している中では例えばセブンスデー･アドベンチストがあります。当該教派では、死者はこの地上でひとときの眠りに就いているのであって、後の日にキリストがもう一度再臨したときに、皆目覚めるのだという理解ですので、亡くなった時点で直ちに天に召された、ということではないという意味で、「永眠」という語を用いることが一般的です。

また、実は神学的理解とは全く関係のないところでの意見もあります。インターネットフリー百科事典のWikipedhiaに、そのものズバリ「召天」という項がありまして、ここでは否定的な理由として、《漢語の文法としては「召天」は「天に召される」と読めず「天を召す」としか読めないため》と挙げられています。つまり、「天に召される」という日本語の表現やその意義を問題にしているのではなく、熟語にするに際して、漢語の原則に従うならば、「召」とだけ書けばそれは「召される」という受け身の形にはならないので、「天に召される」と言いたいのであれば、例えば「被召天」などと書かなければならない、ということでしょう。これは判りやすい例としては、カトリックでキリストについては「昇天」、しかし聖母マリアは「被昇天」というように、自ら昇ったのか、昇らされたのか、という違いが、「被」という文字に現れているというわけです。

とはいえ、現在のこの語の流通の程度からすると、ほとんど気にしなくてもよいわけですけれども、これは単にこの語だけの問題というのではなくて、ご遺族や参列者の心情というものは特にデリケートですから、もしかしたらそれぞれの葬儀の関係者の中にも、こういった細かいことでも気にする人がいるかもしれない、ということは、心の片隅に留めておいていただきたいと思います。

▼「故」を付けるか

なお、近似の問題として、死者を「故人」と呼ぶこと、また式次第の看板の表記などで死者の名前の前に「故」という文字を付けることについて、しばしば否定的な先生がいらっしゃいます。ただ、召天と違ってこちらは実のところ、考え方というよりも多少の誤解に基づくところがあるのではないかと思っています。というのは、私がこれまでうかがったことのあるご意見としては、この「故」を「ゆえ」、つまり「死の事由」と捉えて、「人の死は神様のご計画の内にあるのだから、地上的な事由によるものではないから」というものが主でした。よくわかりませんか？実は私もよくわかりません。もしかしたらこういっ

た理由は後付けで、日本的な習慣と距離を置きたいという心理から発せられたものかもしれませんね。しかし調べてみますと、そもそもこの「故」というのは人の死を表す「物故」という語から来ているわけですけれども、この「物故」は中国の古典から来ておりまして、「物」は「無」、「故」は「事」の意味であり、「無くなる事」で人の死を表した、というのです。そうすると、「故人」というのは「事の人」ですから、要はその葬儀における当事者である、という以上の意味はないわけですね。死者を「故人」と表現することは現在の日本語において広く定着しているわけですが、わざわざそれを否定しなければならない必要があるほどの理由が見いだせないのではないか、というのが私の思うところです。まあ、かといって「故人」ということをあえて推奨しますというわけでもありませんので、ご参考程度になさってください。

／／① 死亡直後に行われる祈り／／

▼口語式文に「枕頭の祈り」が無い理由

それでは、ここから式文に沿って葬儀諸式に入っていきたいと思います。全体の流れと併せて、資料2ページ目以降の各項目をご覧ください。葬儀諸式の始まりは、現在では、死後できるだけ早い時期に、主に亡くなられた場所において行われる祈りの時、名称としては例えば「枕頭の祈り」や「枕辺の祈り」です。①番ですね。ここで「現在では」とわざわざ言う必要があるのは、口語式文をお使いの方はお分かりと思いますが、口語式文にはこの枕頭の祈りが掲載されていないから、ですね。なぜ現在ではほとんど当たり前となっているこの枕頭の祈りが無いのかということは、式文集自体から読み取ることはできませんし、新式文の作成に先立って書かれた、1990年初版の『新しい式文 試案と解説』においても、「枕頭の祈りを加えることとした」と書かれてはいるものの、口語式文においてなぜそれが無かったか、ということについては言及されておりません。

ですからあくまで私見ですが、考えられる理由のひとつとしては、口語式文の初版が1959(昭和34)年であることから、当時は現在ほど通信網や交通網が充足しておらず、死亡直後に連絡を受け、駆けつけて祈るということが現在ほど簡単ではなく、枕頭の祈り自体が一般化していなかったのではないか、ということです。もちろん、危篤の時から連絡を受けて駆けつけ、臨終に立ち会って祈りが献げられる、ということは当然にあったはずですが、その場合には、連続性という点からは、どちらかといえば人生の一番最後に行われる祈り、という認識が強く、葬儀諸式の一番最初に行われる祈り、と位置付けてはいなかったのではないか、という見方もできるでしょう。

いずれにせよ、現在では通常行われるべきものであると認識されているわけですから、口語式文をお使いの方は、枕頭の祈りについては新式文から引用したり、ご自身でお作りになる必要があります。参考として、資料2ページ目の①の式文集比較においては口語式文の枠内に括弧付きで式順の例を示しておりますが、これは新式文において①と③と⑥の式順が同じであり、また口語式文においても③と⑥の式順が同じであることから、順当に考えると口語式文における枕頭の祈りも基本的にはこの③⑥と同じ式順ということになるのではないか、という意味です。

▼式文に関して

ただし、そもそもがここに書かれている式順に従って行うことが、現場に即して適当か、という点については一考の余地があります。まず葬儀諸式全体を通してですが、口語式文においては諸式全てに「祝祷または終祷」が、新式文では「主の祈り」が入っております。これは礼拝学や礼典学の観点からは重要なのかもしれませんが、特にクリスチャンの少ない日本の葬儀の現場においてはどう考えるべきでしょうか。

まず祝祷は、我々にとっては毎礼拝で目にする慣れたものですけれど、知らない人にとっては儀式のここぞというところで行われる、平たく言えば「気持ちの締まる、かっこいいお祈り」、であります。葬儀に参列する遺族近親者の多くは、基本的には葬儀諸式をそれぞれ独立した礼拝の連続体とは受け止めず、諸式全体でひとつの礼典であると認識しています。すると、ひとつの礼典の中で、「ここぞ」のお祈りが何度も出てくると、段々と気持ちが締まらなくなっていくわけですね。そういう意味では、新式文において祝福を⑤番の式に限ったのは、私は正解だと思っています。

次に主の祈りのような参加型の礼式、これは讃美歌もそうですが、それらは、多人数の中に隠れられるならともかく、自分が主になって関わらなければならない状況であるとき、それを知らない者にとってはストレスを生じる可能性があります。それも少数回であれば、なるほどキリスト教ではこうなんだ、という興味が勝るでしょうけれど、繰り返されるにつれ、疎外感や場違い感が募ってくるものです。こちらも、讃美歌はともかく主の祈りについては、諸式を通してどこか1回ぐらいに絞っておいた方が、ノンクリスチャンのご遺族も葬りの営みそれ自体に集中できるでしょう。なお併せて申し上げておくならば、新式文において提案されている、信仰告白や聖餐を、一般的な葬儀の中で行うことには私は反対

です。これほどまでに自分がクリスチャンであるか否かを強く認識させる礼式は、行われるのがたとえ1回だけだとしても、葬儀に参列するノンクリスチャンに疎外感を与えるからです。もしどうしても行いたいのであれば、このような一般的な葬儀の流れの中で行うのではなく、後日教会内で、教会員を中心とした記念礼拝のようなものを営み、その中で行うべきでありましょう。

続いて枕頭の祈りに限った話ですが、先に申し上げたように、これは亡くなった場所に駆けつけて行われることが一般的であり、そして現在では病院において亡くなることが多数、ということは、枕頭の祈りが行われる場所は必然的に病院が多数、ということになります。この際、枕頭の祈りが行われる場所がいわゆる霊安室のような場所であれば特段の問題はありませんが、病室で行われる場合には、大部屋であれば周囲に他の患者さんやご家族がいる、あるいは個室であったとしても、祈りや讃美歌の声が隣室まで届く、ということは十分ありえます。2013年に小学館より第一巻が発行された、「病室で念仏を唱えないでください」という漫画がありまして、この中では医師であり病院のチャプレンでもある僧侶が病院内で読経をした際に、周囲の人から「気味が悪い」とか「縁起でもない」と言われるシーンが登場するのですけれど、いくら日本において仏教が葬式、キリスト教が結婚式のイメージを強く持っていたとしても、それが病院内で見聞きされる場合には当然に人の死を想起させるのですから、事情は同じです。枕頭の祈りを病室で行う場合には看護師などに一言断ってから行うべきですし、特に深夜であれば讃美歌などは省略するか、一節だけを小声で歌うなどの配慮が必要となります。あるいは、病院で行うこと自体を諦めて、自宅や式場教会などの移送先において行う、というのもひとつですね。

また、病室にいるご遺族がほとんどノンクリスチャンのような場合には、讃美歌や主の祈りが先生のワンマンショーになることも多く、場が白けてしまうようなことも往々にしてあります。そんなときは先生も気恥ずかしいし、ご遺族も落ち着きませんから、讃美歌や主の祈りはバッサリ省略し、聖書と先生の祈祷だけにとどめておくほうが、ご遺族にも受け入れられやすいでしょう。

▼実務上、最も大切なプログラム

さて、葬儀諸式のうち、神学的にはさておき、実務上、最も大切なプログラムとはどれでしょう。いろいろなご意見があるとは思いますが、私はこの枕頭の祈りであると思っています。様々な物事について初めが肝心、ということはもちろんですが、特に葬儀ではご

遺族が教会員であるとは限りませんし、そもそも日本においてはご本人以外クリスチャンでない、などということもよくある話です。親しい人を亡くして、気持ちが弱っているご遺族や近親者が、さらに初めて出会う牧師、初めて触れるキリスト教、となると、その不安は非常に大きなものとなります。ですから、このファーストコンタクトの時点でご遺族や近親者との信頼関係を築けるか、それが葬儀諸式を円滑に進められるどうかの分水嶺になるわけですね。あまり表だっては言えませんが、私たちもご遺族との打ち合わせをしている際に、わざわざ牧師が帰ってからコソッと、「さっき先生が言っていたのはどういう意味？」とか、「ちょっとこういうことは直接は言いにくいんだけど…」などと言われることも、実のところたまにはあります。まあ、そうはいっても大体は程度の問題で、最悪の言われようとしては「牧師さんって、他にいないんですか？」ですけれど、そこまで言われることは…(間)…えー、まあ、絶対にないとまでは言えない、という感じですかね。じゃあそこまで言われそうなのはどんな人か、と言いますと、大きく分けて2パターンあります。ひとつは当然のことですが、自分の信念が強すぎたり、ご遺族の心情に寄り添う姿勢が見えにくい人。もうひとつは、真逆ですね。自信がなさ過ぎてオロオロしているのが見える人、でしょう。前者はまだそれでも溢れる自信に権威を感じて、宗教者ってそんなものか、と思う人もおりますけれど、後者はそういったイメージとしての宗教者像とのギャップも相まって、単に頼りなく思われるだけだからです。

▼自信のない司式者へのアドバイス

私も親しくしていただいている先生の中で、「自分は牧師の務めの中で、葬儀が一番いやだ、自信がなくて緊張する」と、10年も経つのにいまだに仰ってるかたがおります。そのかたが初めて葬儀をすることになったとき、司式をするに当たって何に気をつければよいか教えて、というので、私はこんなことを言いました。

「先生、とにかく堂々としていてください。先生が不安を見せれば、ご遺族はもっともっと不安になります。先生さえ狼狽えなければ、よほどでない限りこっちでサポートします。葬儀屋はそのためにいるんですからね。例えば、式の最後が祝祷、遺族挨拶、献花になっていますけど、遺族挨拶を忘れて祝祷後に「ご着席ください、これから献花の時に移ります」って言ってしまったとしても、そこで慌てて「あ、間違えました」とか言わないで、そのまましれっと椅子に座っちゃってください。そしたら私が出て行って、「これから皆さま献花にお進み頂きますが、それに先立ち、ご遺族ご代表の方よりご挨拶を頂戴します」ってアナウンスしますから。そうすれば、参列者は「ああ、元々そういう段取りなのね」って思うだけで済みます。礼拝の途中で判らないことがあっても、讃美歌の間とかに講壇か

らこそこそと降りて訊きにきたりしないでください。讃美歌が終わってから、「ご着席ください。葬儀屋さん、ちょっとこちらにお願いします」ってマイクを通して言ってください。そうすれば、何か葬儀屋に不手際があったんだなぐらいにしか思われませんから」と。それでちょっとは安心なさったのか、結局滞りなく式は終わりました。ただ今でも毎回、そんな自信のない風なことを仰いますから、こちらも毎回「堂々と、とにかく慌てずに」と繰り返しているわけですけど、まあそこは経験ではなく先生の性格の問題ですので、仕方ないかもしれませんね。

ほかにも、葬儀の打ち合わせをしているときなどに、これまで経験したことのない事柄についての質問をご遺族や葬儀社などから受けることもあります。特に新しい教会に赴任したときに、その地域に独特の習俗などについて「先生、これはどうしますか？」と訊かれるような場合です。このときも、「え、ちょっとどうしていいかわかりません」などと答えると、頼りない印象を与えますから、そんなときも慌ててはいけません。葬儀社などに、「前の先生は、どうしてましたか？」などと、自分の意見はあるんだけど、まあ一応ね、みたいな雰囲気で訊いてみて、「ああ、こうでしたね」と返ってくれば、「じゃあ、私はここでは初めてですから、とりあえず今回はこれまでの習慣に倣いましょう」としておく。また答えが返ってこなければ、「これまでの教会のやり方もあると思いますから、ちょっと役員とも相談してみますね」といって持ち帰って確認する、というやりかたもあります。

▼シミュレーション

ではせっかくですので、そのあたりも踏まえて、枕頭の祈りの現場をシミュレーションをしてみたいと思います。まず、亡くなったという電話がかかってきますね。このとき確認すべきことは、もちろん亡くなったご本人の氏名、電話をくれた人の氏名、ご本人との関係、現在の居所、移動中でも連絡の取れる電話番号などに加え、自分がその場所に着くまでの所要時間がどれくらいだけれども、それまでご本人たちがそこにいる予定なのか、あるいは移送される先に向かったほうがよいのか、また逆にこれから看護師などによる死後処置を受けるために、慌てて行っても早すぎて困るというようなことはないのか、そして向かう先が自宅などの場合には、車を駐めておける場所がどのあたりにあるのか、などといったことも、できるだけ訊いておいたほうがよいでしょう。

次に、例えば場所が病室として、そこに着きました。まずは電話をくれた人やその中で代表となる人を確認する必要がありますが、その人たちが仮に教会員で、自分がよく知っ

ているからといっても、その人たちばかりと話していてはいけません。併せて早い段階で、集まっている他のご遺族近親者に対しても、「〇〇教会の牧師、誰々です。今回の一連の葬儀の司式を務めさせていただきます」と、身分と目的をハッキリ表します。特にノンクリスチャンや日頃教会に馴染みのないご遺族などは、「え、あれ誰？何するの？」という不安を抱いている場合もありますから、まずはここをきっちりしておいたほうがよいでしょう。

そして、挨拶が終わったら、さっそくお祈り…ではありませんね。次は、「お顔を拝見してよろしいですか」、と一応ご遺族に断って、亡くなったご本人と向き合います。なお念のために申し上げておきますが、今お話ししているのはテレビや解説書などでよく言われているような、マナーだからこう、という話ではありませんよ。見方によってはこすっからい話ですが、あくまでわずかなチャンスを生かして、ご遺族から信頼を得るためのテクニックの話と思っていてください。

では亡くなった方のお顔を見ること、なぜこれが重要なのか。「我々は葬儀を通して神様に意識を向けているな」どといったところで、そんな感覚は、特にキリスト教に馴染みのないご遺族には直ちには通用しませんよね。ご遺族は生前から連続する、亡くなった方の一人格を心の中心に置いています。このときご遺族が信頼できるのは、自分たちの大切にしているものを、同じように大切にしてくれている人、シンパシーを感じられる人、だからです。

さらにご遺族の気持ちの中で、亡くなった方は、実のところまだ半分は生きています。そこで、お顔を見るに際して、できれば本人に対して、生きている人に対して行うのと同じようなアクションもしたほうが効果的だといえます。例えば、亡くなった方が教会員で、先生もよく知っているような場合には、「〇〇さーん、来ましたよー」、などと声をかけると良いでしょう。ただ、逆にあんまり知らない人であれば、下手に声をかけなくても、軽くうんうんと頷くようにする程度でも、じっと見るだけよりは柔らかい印象があるでしょうね。

そして、やや経験がいるのはその後です。亡くなった方との面会を受けて、今度はご遺族に対して一言声をかけたいところですね。その内容としては、「最後までよく頑張りましたね」とか、「安らかなお顔で、眠ってらっしゃるようですね」などというのが、すぐに思いついて無難なように思われるかもしれません。しかし、ここにはちょっとした落とし穴

がある場合があります。ご本人の元気なときの様子や闘病の間の様子を先生がよくご存じで、ご遺族ともこれまでに何度も話しているような場合には、事情に即した言葉がかけられると思います。しかし、事情をあまりよく知らないのにうっかりこういうことを言うと、もしご遺族が内心、そうは思っていないとき、例えば入院中は「痛い、さっさと退院したい」などと文句ばっかり言ってたな、とか、「点滴で顔が膨れて、自分の抱いている印象と違っていやだな」なんて思っているようなときには、まったく逆効果になることもあるからです。

そんなこといったら、何も言えないじゃないか、と思うかもしれませんが、実のところそれが半分は正解、よくわからないのに無理に自分の感想なんて言わないほうがよいのです。ただ、そういうときは代わりに、「最後はどんなご様子でしたか」とか、「どんなお父さんでしたか」などと言って、相手にボールを投げてしまいましょう。そうして、ご遺族の側から「優しいお父さんでした」という話が出れば、「そうですか、優しいお父さんだったんですね」、「厳しいお父さんでした」と言われたら、「そうですか、厳しいお父さんだったんですね」、「最後は痛みも感じていなかったようです」と言われたら、「そうですか、痛みがなかったのなら、それだけでもよかったですね」などと同じ事を相手に返すだけで、ご遺族からすると「ああ、この先生は自分たちの話をちゃんと聞いて、わかってくれている」という印象を持って安心するものです。

私たちも、ご依頼があって駆けつけたときに先生がまだ到着していないというような場合には、もっとご本人やご遺族のことをわかっていませんから、「お父さんはいつ頃からこの教会のメンバーなんですか」とか、「ご入院は長かったんですか」とか、「ご兄弟は多いんですか」など、一部その後の打ち合わせに関連する聞き取りも含めた質問を投げかけながら、間を持たせつつご遺族との距離を詰めていく、ということを、まあそこそこの年数、葬儀社をやっていると、現場では反射的にするようになってくるものです。

なおこれは、葬儀に限らず日頃の教会の中でも使える、基本的なテクニックですから、うまく使えるようになれば結構いろいろなところで役に立つと思います。

▼どこに立つべきか

さてこうして多少会話して、一段落ついたら、やっとそこで「では、これから一連の葬儀を始めるにあたって、まずはここで聖書を読んでお祈りしたいと思います」などと切り

出して、枕頭の祈りを始めます。ここで、冒頭の例に挙げた、先生が「どこに立って祈るか」ということが出てくるのですが…そもそも例に挙げたとき、きっと半分の方は「そんなの、決まりあるの？」と思われ、残りの半分の方は「そんなの、どこでもいいじゃない」と思われたのではないかと推測します。そりゃそうですよね。べつにそんなことは決まりはありませんし、どこでもいいといえばどこでも構いません。けれども、じゃあより良いアイデアなんて全然ないのか、というとそれも違います。チコちゃんよろしく、何でも考えてみれば理屈はつくものです。

資料の最後のページに簡単な図を載せておりますが、ベッドがこうあり、故人が横たわっているとします。主なご遺族がこちらにいて、ベッドの周りは自由に動けると仮定しましょう。立てる場所の候補として、ＡＢＣＤＥＦＧとします。まず式文集を開いてみますと、口語式文では先に申し上げたように枕頭の祈りは掲載されておりませんが、納棺式の項において補足的に「枕辺に座って行う」と書かれています。ここで「座って」というのは、本書が書かれた当時の事情から、主に自宅の和室にて布団に寝ている状況を想定しているからですが、とにかく枕頭の祈り、枕辺の祈りと言うように、亡くなった方の枕元で行うもの、というのは一般的な認識です。では枕元といえる候補はどこかというと、ＡＤＥの３箇所ですね。このうち、もっとも適当といえるのはここ（Ａ）、故人を挟んで主要なご遺族と反対側の側面です。なぜここかというと、ひとつは先生の顔がご遺族から見えるから、です。申し上げたように、特にクリスチャンでなかったり司式者に初めて会うご遺族は、この人は何をするのだろう、と不安なものです。枕辺の祈りをするときに、先生の顔が見えて何をしているのか分かるのと、背中を向けていて何をしているか分からないのと、どちらがより安心できるか、というと自明のことでしょう。もうひとつ大切な理由は、ご遺族から故人の顔が見える、ということです。これも申し上げたように、ご遺族は心の中心に故人を置いて式に臨んでいるのですから、その視線も当然に故人に注がれます。先生がご遺族と故人の間に立ってしまうと、その視線を遮ってしまうことになるわけです。では、それならＤの位置でもよいのではないかと思われるかもしれません。しかしこれも先に申し上げた、シンパシーの観点からはＮＧです。ご遺族は故人と向き合っていたい。そして牧師が同じようにすることで安心します。故人の対面はどこか、というと、故人は横たわっているのですから実際には上なんですが、観念として、その人の「前方向」と思うのは普通は足下の方向です。故人が立っている状況を想像したとき、先生が故人に向き合って祈るのと、背後から祈るのと、どちらがよいか、と考えていただければお分かりいただけると思います。

この３つの観点を踏まえると、全体の中で２番目に良いであろうポジションは、残った枕元ではなくてここ(Ｂ)になるでしょう。Ｃは、というと、ご遺族の意識の中で故人の中心として捉えられるお顔から一番離れていますので、ＡやＢに物理的に立てないというような状況ならばともかく、そうでなければ「なんでわざわざ距離を取るのか？」という引っかかりを感じさせてしまうかもしれません。では、ベッドの向こう側に回れない状況であればどうか。その場合に最も良いポジションはＦ、手前の真ん中です。手前にいる以上、先生がご遺族と対面にならないのは仕方がありませんが、それでも故人の顔を隠さないように半分ずれた方がよいといえるでしょう。また、この位置取りでの小技として、布団の上からでよいので故人の手に先生の手を重ねる、というのは存外効果的です。これも、ご遺族にとっては自分たちの大切にしている故人を、先生も同じように大切にしてくれている、というふうに思えますし、自然に前屈みになりますから、ご遺族からも故人のお顔がより見えやすくなることでしょう。

▼和室で行う場合

ではこれも併せて例に挙げた、和室で行う場合ですけれど、口語式文にもあるように基本的には故人がベッドでなく布団に寝てらっしゃるなら、座って行うべきです。その際の先生のポジションは先ほどと同じ考え方でよいでしょう。ただし、部屋の広さからして布団の周りに座ることができないとか、先生自身が膝が悪くて座ることが困難な場合には、もちろん立って行うことも検討しなければなりません。この場合、最適な位置は先程と違いＣになるでしょう。Ａでは故人のお顔が先生の足下にあり、真下に見下ろすような形になってしまうからですが、ただこれも布団の向こう側に回れるだけのスペースがある場合の話です。もしＣに立てないとすれば残りの候補はＧですが、仮にここも難しい場合に、じゃあ次はＦかというと、ご家族が座っているのにその前に先生がドンと立っているのはいまいちですよね。そんな時には発想を大きく変えて、ご遺族に「故人のすぐ近くにお寄りください」と促して、先生はご遺族たちの後ろに立ち、同じ方向を向いて祈る、というのもひとつの方法でしょうね。

▼今回の話で重要なこと

さて、まだ枕頭の祈りが終わっただけなのに、もう予定時間の半分が過ぎてしまっております。こんな調子で大丈夫なのか…と思われるかもしれませんが、そもそも冒頭に申し上げたように、この全体図に沿って流れをお話しするだけなら数分で済みます。そして行

間の話の中でもっとも重要なのは、すでにこれまでにお話ししたような事柄です。もちろんそうは言っても、表面的なテクニックが直ちに重要だということではありません。テクニックはあくまで、気持ちや時間に余裕を生み出し、その分、他のことにまで力を注げるようになるためのものです。大切なのは、ご遺族の感情はどのようなものか。ご遺族の視点はどのようなものか。先生方は周囲からどのように見られているのか。それらを通して、信頼関係はどのように築かれていくのか。こういった視座を持って、葬儀の実務に当たっていただくことでしょう。

それでは、以降の諸式についても軽く流していきます。

／／葬儀の打ち合わせ／／

そう言いながらいきなり諸式外の話ですが、次はご遺族や葬儀社とともに行う葬儀の打ち合わせです。葬儀の打ち合わせは大まかに3つのブロックに分かれております。先程の図の下をご覧ください。一つ目は、先生とご遺族と葬儀社の三者で行う、それぞれの式の持ち方、公開範囲、規模、式場、日時、火葬場などを決める段。二つ目は主に先生とご遺族の間で、葬式の中の詳細なプログラム、例えば聖書をどの箇所にするか、讃美歌を何番にするか、弔辞を頼むか、などを決める段。三つ目は主にご遺族と葬儀社との間で、葬儀のために提供される物品やサービスの内容、またそれに伴う費用などを決める段です。これらのうち、一つ目と二つ目については、可能な限り初めから先生がその場に居て三者で話を進めていくべきなのですが、何らかの都合で先生の到着が遅れ、ご遺族と葬儀社だけで先に相談を始めることが分かっている場合には、いくつかのことをご遺族を通して葬儀社に伝えてもらうか、打ち合わせ前に葬儀社から直接連絡をもらえるようにご遺族にお願いするなどしておいたほうがよいでしょう。

その事柄とはまず、式の日時は牧師のスケジュールを確認してから決めて欲しいこと。これは一般葬儀社にありがちなことですが、葬儀の日時を自社の会館やスタッフの都合、火葬場の空き具合などから、ご遺族との相談だけで決めてしまい、それから僧侶など宗教者に依頼して、宗教者の都合が悪ければ別の宗教者に頼めばいいや、と思っている場合があるからです。キリスト教に馴染みのない葬儀社だと、よくわからずに日曜日の午前中に葬式をすることに決めて、先生、この時間でお願いします、なんていう連絡が入ることもあるようですから、ここは特に気をつけてください。また、仏式の葬儀では会葬者が多い場合、読経の途中でも会葬者の焼香を行って、出棺の時間に間に合わせるということが普

通にあります。キリスト教葬儀では説教している最中に献花に進む、なんていうことはないのですから、礼拝が終わるまでにこれぐらいの時間、弔辞や弔電、代表挨拶でこれぐらいの時間がかかるから、それに献花やご遺族のお別れにかかる時間を足して、開式から出棺まで少なくともこれだけの時間を設定して欲しい、ということも、日時を決める前に言っておく必要があります。そのほか、教会員が葬儀の中で手伝いたいことがあるか、例えば受付、式次第の印刷、献花の受け渡し、ご遺族の接待、駐車場の案内、終了後の清掃や、葬儀社が片付ける際の監督などが考えられますが、それらがあれば伝えておきます。また、教会の中で使える設備と触ってほしくないもの、例えばオルガンや音響機器などが代表的ですが、他にも聖餐台はどこかに逃がすのか、そのまま置いておくのか、その場合、台の上に花や写真などを乗せても良いのか、といったことについては、特にその教会で初めて施行する葬儀社に対してはできるだけ打ち合わせ前に伝えておかないと、教会の構造に全く合わない飾りの様態をご遺族に提示してしまうということもあり得ます。そういった意味では、もし可能なら日頃から近くの葬儀社のいくつかを候補に挙げて、担当者に教会を実際に見てもらい、いざという時にはこうしてほしい、というお願いをしておくほうが、その場になっていちいち先生が葬儀社に指示を出す必要もなく、慌ただしい中でのご負担も軽減されるはずです。あるいは、礼典の委員などが葬儀社の施行についていて監督できるなら、その部分を任せてしまうという方法もあるでしょう。

二つ目のブロックについては、近年いわゆるエンディングノートあるいはシートの教会版を作成し、ご本人に生前から愛誦聖句や愛唱讃美歌を、弔辞や奏楽をお願いしたい人などを書いてもらっていることもあるでしょう。そういったものがない場合、ご遺族に聞き取りをすることになりますが、クリスチャンが故人だけでご遺族にはさっぱりわからないというような場合には、ご本人の使っていた聖書や讃美歌を見せてもらって、付箋や書き込みがないか探してみるということもあるでしょう。

そして三つ目のブロック、ご遺族と葬儀社がサービスの内容や費用を打ち合わせする段については、先生方は必ずしも同席する必要はありません。逆に、ここを毎回べったりとついていてあれやこれやと口を挟むと、葬儀社によってはギクシャクするところもあるでしょう。初めの１～２回は「今後の参考に…」といった感じで同席されて、あとはご遺族が心細いと仰る時ぐらいにとどめておかれるほうがよいかと思います。ただもちろん、葬儀の後にご遺族から不満がなかったか聞き取りをおこなって、その後に繋げていくということは考えられてもよいでしょう。なお資料の中に、弊社のパンフレットを入れてありま

す。葬儀社によってサービスの選択肢や料金の構造は全く異なりますけれど、ご遺族とおおよそ何を話し合って決めているのかということの参考になさってください。

／／② 遺体を棺に納めるときに行われる式／／

▼自宅で行うか、式場で行うか

それでは諸式に戻りまして、次はご遺体を棺に納めるときに行われる式ですが、一般的な呼称としてここでは納棺式と呼びます。式文集においては納棺式は主に自宅で行われることが想定されています。これは、口語式文の作成時、自宅死亡が約7割と多く、そのまま自宅で納棺した後に式場に棺を運ぶ、という流れが一般的であったからです。ただ、先に申し上げたように近頃では病院死亡と逆転しておりますので、自宅に帰らず直接教会や葬儀会館に移送されることも増えています。またマンションなど、構造的に納棺に向いていない自宅も増えている、例えば、部屋の中が見えにくいように玄関を入ったらすぐに横向けに廊下があるような構造では、この入り口のところが棺を回すのに困難なのですが、こういったことから、納棺式を行う場所も教会など式場のほうで、ということが、特に都市部では増えてきています。年配の方などの中には、納棺は自宅でして棺を送り出すものだ、というこだわりを持っている方もいらっしゃいますが、葬儀社としては先ほどの構造の件や、実際の納棺作業に必要なスペースの問題、これは一部屋の大きさが小さくなっていることや、布団でなくベッドを使用していることが増えていることなどから、教会でできるならその方が都合がよいことが多いのです。また先生方にとっても説教などの準備に忙しい中で、自宅まで往復する時間が節約できるなど、教会で納棺式を行うメリットはあるでしょう。

▼葬儀社に納棺式をしたいと伝えておく

さて、納棺式を行う場合には、行うということ自体を葬儀社に予め伝えておく必要があります。これは、世間で多い仏式などの葬儀では、宗教者によって納棺式に相当する式が行われることがほとんどないからです。あるとすれば湯灌の儀式などに引き続いての納棺ですが、これは葬儀社が主導して行われますので、何も言っていないとご遺族と葬儀社の二者だけで納棺のタイミングが決まってしまっていることもあります。納棺式を、いつ、どこでしたいから、準備してください、また、納棺式はこういう流れで進んで、その中のこのタイミングで納棺をしたいので、ご遺族の手助けをしてください、ということを、葬儀社の担当者に予め伝えておきましょう。

▼納棺のタイミング

また、式の中における納棺のタイミングはどこかといいますと、口語式文では納棺式が終わってから、新式文では終わってから、あるいは2番目の讃美歌を歌う中で、と書かれています。この2番目の讃美歌を歌う中で、というのは唐突に現れたように思いますけれど、実は口語式文の埋葬式の中で、讃美歌の間に埋葬する、という表記がありますから、そこから援用しているものと思われます。ただ、この讃美歌を歌いながら納棺する、というのも私はあまり賛成できません。納棺はご遺族が一緒に手を添えて行うように勧められることが多いのですが、この時、讃美歌を歌いながらとなると、ご遺族は普通慣れているはずのない納棺の作業と、特にノンクリスチャンであれば慣れない讃美歌を歌うことを同時に行うということになりますので、結局どちらにも集中できないのです。ですから、どうしても讃美歌の中で、ということであれば、1番を歌った後に一度中断して納棺、改めて2番を歌う、というようにしたほうがよいでしょう。さらに言うと、葬儀社の方も、キリスト教の専門葬儀社以外であれば、そもそも式をもって納棺するということ自体に慣れていないわけですから、あまり複雑なことは言わずに、式が全て終わってから、納棺の作業は任せます、といってあげたほうがスムーズにいくかもしれませんね。

／／③ 自宅等からの出棺のときに行われる式／／

そして③番のいわゆる出棺式ですが、申し上げたように、式文集では納棺を自宅ですることが前提となっておりますので、ここでいう出棺とは、納棺後に式場に向かうために自宅から棺を送り出すことです。そのため、自宅納棺が減っている現在では、この出棺式も行われることが減っています。出棺式が行われる場合、出棺式単体で行われることも、納棺式と一体の式として行われることもあります。内容にも重複するところがありますから、タイミングが大きく離れていないのであれば、一体の式として行った方が合理的だとはいえます。また納棺式と同じで、他の宗教葬儀ではここでいう出棺式に相当する礼式を持つことはほとんどありませんので、出棺式を行いたい場合にも葬儀社に予めその旨を伝えておいた方がよいでしょう。

なお司式者によっては葬式の後、火葬場に向かう出棺の際にこういった出棺式、あるいはもっと簡略にでも礼式を行う場合があります。ただそうすると、葬式、出棺式、火葬前式と短い時間の中で行われる礼典の数が増え、スケジュールもタイトになりますし、参列者も緊張状態が続いて疲れてしまうという可能性もありますので、状況による配慮は必要となるでしょう。

／／④ 主に葬式の前の夜に行われる式／／

次に④番、主に葬式の前の夜に行われる式、ここでは前夜式と言いますが、仏式の少し古い言い方ですと「半通夜」といったものですね。前夜式が葬式に準ずる形や規模で行われることは、90年代～2000年代をピークに、現在では特に都市部を中心に減少しています。理由は亡くなる方の高齢化に伴い、現役世代の一般会葬者が減少しており、夜でなければ参列しにくいという事情が薄れていること、またご遺族の高齢化もあり、二日間にわたる長時間の式典では疲れてしまうこと、などです。前日の夜には全く式典が持たれないという場合もありますし、参列者を近親者に絞るなどして式順を簡略にして行われることもあります。また、前夜式を行うぐらいの時間に納棺式を行い、翌日に備えるというケースもあります。さらに、これらの変化形を自宅などで行い、棺はその直後や翌日に式場に運んで、一般参列者には翌日の葬式の時間だけを告知しておくというようなやり方も考えられます。

／／⑤ 葬儀諸式の中心として行われる式／／

▼骨葬の可能性

さて、式文集ではこの次に来るものは⑤番のいわゆる葬式です。全国的に見れば、こうして葬式の後に火葬がくることが一般的です。しかし一部地域、よく知られているのは東北地方などにおいては、ここで先に火葬があり、収骨を経て、遺骨の状態で葬式を行うことが伝統的な地域もあります。資料の1枚目の⑤番⑥番の右側に書いていますが、これを「骨葬」と呼びます。それに対し一般的な順序のほうは名称がありませんが、研究者の間では便宜上、「遺体葬」などと呼ばれています。数人の知人に訊いたところによりますと、群馬においては、しばらく前までは骨葬の地域も見られたものの、近頃ではその多くが遺体葬に取って代わられているとのことでしたが、いずれにせよ、先生方が今後どのような慣習の地域に赴任されるかはわかりませんので、どちらもあり得るということは覚えておいて頂きたいと思います。

そして、遺体葬が主である地域においても、事情によって骨葬を選択するケースはあります。例えば、初めのほうで申し上げた、遺体の損傷腐敗が激しく、そのままで葬式を行うことが難しい場合。また、旅行先などで亡くなり、葬式を行いたい場所まで遺体を直ちに運ぶことが困難な時には、現地で火葬して、遺骨を持ち帰って葬式を行うこともあります。他にも、故人が著名人で参列者の規模が非常に多くなる見通しの場合などに、先に近

親者で葬式、火葬まで済ませ、対外的には改めて遺骨の状態で、十分な準備の後に葬式を行う場合。また故人の希望、例えば病気で痩せた姿を友人たちに見られたくない、などの理由で、その希望に添って先に火葬し、元気なときの遺影を掲げて葬式をするようなケースもあるでしょう。

逆に骨葬が主な地域であえて遺体葬が選択される場合は、やはり最後にご本人のお顔を見てお別れをしたいという希望が出たとき、ということになるでしょう。

▼遺体葬の場合

遺体葬の場合、葬式の運営上、特に注意しなければならないのは、出棺の予定時間を守ることです。特に都市部の火葬場は1日あたりの使用件数も多く、受け入れスケジュールがタイトな場合もありますので、入場時間が予定よりも大幅に遅れると、骨揚げの時間を後回しにされたり、その葬儀社からの予約を制限するなどの重いペナルティを火葬場から課せられるような…まあ、これは実際に行われることは希だと思いますけれど、繰り返していればそう脅されることもたまにはあります。ですから、打ち合わせの際にできるだけ正確に参列者の規模やかかる時間を葬儀社と協力して読んでいただきたいということはもちろん、もし分からない部分があるなら、たとえ葬式後に出棺時間を待つことになったとしても、少し余裕を持って時間を設定しておいたほうが、ご遺族のお別れの時間をせっついたりすることもなくてよいでしょう。骨葬の場合には、直後に納骨・埋骨を行うのでなければ、特に後ろの時間を気にする必要はありませんが、逆に参列者ものんびりしていて、いつまでも帰らず、片付けにかかれないなんていう話もきいたことはありますから、葬式の終了、解散の案内はしっかりしたほうがよいでしょう。

▼式の流れ

式順は基本的な礼拝の流れに、適宜葬式特有のプログラムが加わります。略歴紹介、弔辞、弔電披露、遺族挨拶、献花などですね。時折、例えばご遺族や親友によって、故人の好きだった曲を演奏する、「献奏」などのプログラムが採用されることもあります。それぞれのプログラムをどこに挿入するべきか、という話になると、新式文で触れられているように、「礼拝には礼拝の様式があるのだから、それ以外のプログラムは礼拝と分けて最後に纏めて行うべきだ」、なんていう意見もありますけれど、現場に即してはそんなに堅苦しく考えず、ご遺族の希望も訊きながら、全体の流れに配慮して組む、というぐらいの気持ちで当たられるのが一番でしょう。言い方を変えれば、礼拝に不可欠な要素を欠いたり、あ

まりにキリスト教的でない習俗を持ち込むのは困るけれど、それ以外はご遺族の気の済むようにやってくれ、というぐらいの寛容さがあるほうが、葬儀実務は円滑に回ります。

▼式の名称をどうするか

そのほかの悩みとしてよく聞かれるのは、式の名称ですね。資料にもいろいろな候補が書いてありますけれど、自分はこれでいくんだ！と強く思ってらっしゃる先生は、私の経験上3分の1ぐらいでしょうか。中には、来る人が分かればなんでもいいよ、とか、ご遺族の希望を訊いてあげて、なんていう先生もおられますし、あまり葬儀のない小さな教会では、「あれ、前回何にしたっけ？」なんてこともしょっちゅうあります。

世間一般ではこれまで比較的「告別式」が多かったのですが、近年仏教界の一部からは「葬儀式」を用いるべきだという意見がでています。これは、そもそも告別式という名称が、明治期の思想家である中江兆民という人が自分の死んだときについて、宗教的な葬送の儀礼、つまり葬儀を行うのではなく、宗教儀礼を排して社会的に関わった人たちとの別れの式を行うように、と言い残したことから名付けられたもの、つまり、告別式はそれ自体、無宗教の葬礼を指しているからだ、と言われています。キリスト教界でも、地上の別れは永遠の別れではないのだから、告別とは言いたくない、という意見は昔からよく聞かれるところですが、そんなことよりも、参列するノンクリスチャンを含めた多くの人々に分かりやすい名称にするべきだ、という意見もあって、ここはほんとうに教会や司式者によって様々です。

なお、現在でも宗教儀礼は要らない、無宗教で送って欲しいという人もおりますが、中江兆民の時代にも同様に既存宗教の儀礼に対する不満は大衆の中にありましたので、その後告別式というやり方と名称は支持を受けて広まりました。しかし反対に、死者を懇ろに葬るためには宗教儀礼が必要だ、という人も多数おりましたので、だんだんと葬儀もする、告別式もする、という多重式典化が進んでいきます。その頃の参列者への告知には、「何日何時より葬儀、引き続き告別式を営む」などと書かれており、その後、式典が合理的に一体化していく中で、「葬儀並びに告別式を営む」さらに「葬儀告別式を営む」となっていき、いつしか「葬儀」だけとか「告別式」だけに変化していったようです。ですから、新式文のいうように礼拝とその他のプログラムを分離し、名称を葬儀告別式にする、というのが、本来的なやり方だ、なんていう見方もできるわけですけれど、印刷物を作ったりするときに長くて面倒ですから、私はあまりお薦めしません。

／／⑥ 火葬の直前に行われる式／／

そして⑥番、火葬の直前に行われる式ですが、ここでは火葬前式と呼びます。火葬前式での注意は、とにかく長くしないこと、です。特に都市部の火葬場のスケジュールがタイトだという話はしましたが、それに輪をかけて、キリスト教の火葬前式は長くて、他の入退場とのタイミングを合わせづらい、というのが火葬場サイドのおおよその認識だったりします。また火葬場によって、そこで定められている火葬前式を行うタイミングは異なり、炉前とは別の告別室で行ったり、炉の直前に棺を置いて行ったり、炉に棺を納めてから行ったり、と様々ですので、慣れないうちは葬儀社に「今から、って合図してね」と頼んでおいたほうがよいでしょう。また讃美歌を歌う場合、ヒムプレイヤーなどを持ち込まれるのを嫌う火葬場もありますので、そのあたりも若干の注意が必要です。

また式文集にありませんのでここには記載していませんが、希に骨揚げの時にも祈祷などをされる先生がいらっしゃいます。もしされたいのなら、そのタイミングや場所についても葬儀社を通して火葬場に確認しておく必要があるでしょう。

／／⑦ 遺体や遺骨を墓や納骨堂に納めるときに行われる式／／

▼納骨の時期

そして⑦番、遺体や遺骨を墓や納骨堂に納めるときに行われる式、とちょっとややこしいので、まず用語の整理から。遺体を墓に納める、というのは、つまりは土葬のことですね。口語式文にある「埋葬」という語は、日本の法律上の用語としてはこの「土葬」のことを指します。法律上は他に、遺骨を墓に納めることを「埋蔵」、納骨堂に納めることを「収蔵」と言いますが、これはほとんど知られておらず、併せて納骨ということが多いと思います。火葬率がほぼ100%になった現在では、一般に遺骨を墓に納めることを埋葬や埋骨と呼ぶことも多いでしょう。口語式文が作られた時代には、日本でもまだ土葬が十分な数、残っていましたので、口語式文には土葬でも火葬後の埋蔵でも使えるように注意書きがありますけれど、新式文では遺骨であることを前提として、名称の例に埋骨や納骨という語が追加されています。

納骨がいつ頃行われるか、ということは、ご遺族や教会の都合にもよりますし、地域の慣習もあるでしょう。先ほどお話しした骨葬が主な地域では葬式の当日に行うこともありますし、関西などでは仏式の満中陰、つまり四十九日が過ぎたあたりに行うことが一般的です。教会墓地に納める場合には、春秋の墓前礼拝の時に複数人を一緒に納めることもよ

く行われています。遺骨をいつまでに墓や納骨堂に納めなければならないという法律上の定めはありませんので、何年も自宅に置いたままという人もいます。いずれにせよ、ご遺族の集まりやすさや先生のご都合、暑さ寒さといった気候の様子などを考え合わせて決めるとよいでしょう。

▼実務上の注意

実務上の注意としては、式の進行だけでなく墓石を開閉する作業などについてもイメージしながら計画しなければならない、ということがあります。教会の納骨堂などであれば、教会で鍵を管理していると思いますが、個人の墓の場合には予め墓石事業者などに連絡を取って、立ち会ってもらうことが必要な場合も出てくると思います。また納骨に際しての行政上の手続もありますが、ご説明していると長くなりますので、疑問があればまたお訊ねください。

▼納骨のタイミング

なお納骨のタイミングについて、口語式文では讃美歌を歌う間とあり、新式文には「ここで納骨」という記述自体がありませんが、納棺式の話と考え方は同じで、落ちついて行うなら式の終わった後か、讃美歌を中断して行うのがよいのではないかと思います。

／／⑧ 後日、故人を記念して行われる式／／

最後に⑧番、葬式から適当な期間を空けて、故人を記念して行われる式です。ここでは記念会と呼びます。もうここまでくるとやるかやらないかもそれぞれですし、やり方も様々で、記念会を単独で行うこともあれば、納骨式に前後して行うこともあります。また家庭集会のような形で行われることもあれば、教会で葬儀に準ずるような形で行われることもあります。さらにその前後に会食を伴う場合も多く、場合によっては会食メインで食べながらお祈りや思い出を語る時が持たれるようなこともあります。いずれにせよ、納骨式や会食などを併せて、あるいは連続して行う場合には、礼拝は主要なプログラムだけで思い出は会食に回すなど、式順も全体をひとつの流れで見ながら決める方がよいでしょう。

▼終わりに

さて一通り見てきましたが、いかがでしたでしょうか。なお予備の資料として、この「ひとめでわかるキリスト教葬儀の基本的な流れ」という冊子を挟んでおります。これは有志で作ったものですが、今回のような諸式の中のことではなく、その周辺のことを基本的に

取り扱っておりますし、ご遺族・葬儀社・教会と分けて、平行して実際に行っていることを一覧にしていますので、併せてご覧になってください。またこれは教会やクリスチャンだけでなくノンクリスチャンのご遺族やキリスト教葬儀の施行にあまり慣れていない一般葬儀社にも配布できるように作成しております。後ろの方には簡単にですが一般葬儀社に向けたキリスト教葬儀施行の際のアドバイスなども書いておりますので、もし何冊かいるようでしたらご連絡頂ければお送りします。ちょっと作りすぎてしまいましたのでご遠慮なくどうぞ。印刷用にはなっておりませんが、同じ内容のものはＷＥＢ上でもご覧いただけます。

もうひとつ、こちらは弊社で2016年から2018年の3年間に取り扱った、プロテスタント葬儀に関して統計を取ったものです。前半は葬儀がどのように行われたかなど、後半は選択されたサービスや料金がどのようであったか、というものです。ただしこれはあくまで阪神感の事情であったり、弊社の料金体系によるものですから、こちらの事情とは直ちに合致しないと思いますけれど、よろしければご参考になさってください。この資料もＷＥＢ上にありまして、これはＰＤＦでそのまま印刷できるようになっております。

それでは長時間ありがとうございました。

配付資料

葬儀諸式の全体像

▼ 比較的多数の流れ

教会員が
病院で
亡くなる

① 死亡直後に行われる祈り

葬儀の打ち合わせ

② 遺体を棺に納めるときに行われる式

③ 自宅等からの出棺のときに行われる式

④ 主に葬式の前の夜に行われる式

⑤ 葬儀諸式の中心として行われる式

⑥ 火葬の直前に行われる式

⑦ 遺体や遺骨を墓や納骨堂に納めるときに行われる式

⑧ 後日、故人を記念して行われる式

▼ 変化の例

教会員以外が
病院以外で

個別の事情により順序の変更、また省略されることも

骨葬の場合
⑥→⑤(→⑦)の順

⑦⑧を連続して、または一体化して行うことも

① 死亡直後に行われる祈り

【名称の例】
（新）枕頭の祈り，（新）臨終の祈り，枕辺の祈り

【式文集比較】

口語式文	讃美歌 聖書 祈祷 頌栄 祝祷または終祷	※注

新式文	賛美歌 聖書 祈祷 主の祈り 賛美歌

② 遺体を棺に納めるときに行われる式

【名称の例】
（口）納棺式，（新）納棺の祈り

【式文集比較】

口語式文	讃美歌 聖書 祈祷 讃美歌 納棺の辞 頌栄 祝祷または終祷 《納棺》

新式文	賛美歌 聖書 祈祷 主の祈り 賛美歌《納棺※注》 《納棺》

③ 自宅等からの出棺のときに行われる式

【名称の例】
（口）出棺式，（新）出棺の祈り

【式文集比較】

口語式文	讃美歌 聖書 祈祷 頌栄 祝祷または終祷

新式文	賛美歌 聖書 祈祷 主の祈り 賛美歌

④ 主に葬式の前の夜に行われる式

【名称の例】
（口・新）前夜式，（新）前夜の祈り，葬送前夜式，葬送前夜の祈り，告別前夜式，
前夜祈祷会，棺前祈祷会　等々…

【式文集比較】

口語式文	讃美歌 聖書 主の祈 聖書 祈祷 讃美歌 説教または感話（随意） 讃美歌 祝祷または終祷

新式文	賛美歌 聖書 祈祷 （説教、感話 故人の思い出 祈祷 愛唱賛美歌　など） 主の祈り 賛美歌または頌栄

⑤ 葬儀諸式の中心として行われる式

【名称の例】
（口・新）葬式，（新）葬送式，告別式，葬儀，葬儀式，葬儀告別式，葬送礼拝　等々…

【式文集比較】

口語式文	前奏 聖書 讃美歌 聖書 祈祷 讃美歌 故人の略歴 説教または式辞 祈祷 讃美歌 弔辞 頌栄 祝祷または終祷 後奏 遺族挨拶

新式文	前奏 招詞 開会祈祷 主の祈り※A 詩編交読 賛美歌 聖書 説教 賛美歌 信仰告白（使徒信条） とりなしの祈祷 賛美歌 （思い出・弔辞※A 弔電披露※A） 主の祈り※B 聖餐 賛美歌または頌栄 祝福 後奏 （思い出・弔辞※B 弔電披露※B） 遺族挨拶

⑥ 火葬の直前に行われる式

【名称の例】
（口）火葬前式，（新）火葬前の祈り

【式文集比較】

口語式文	讃美歌 聖書 祈祷 頌栄 祝祷または終祷

新式文	賛美歌 聖書 祈祷 主の祈り 賛美歌

⑦ 遺体や遺骨を墓や納骨堂に納めるときに行われる式

【名称の例】
（口）埋葬式，（新）埋葬の祈り，（新）埋骨の祈り，（新）納骨の祈り

【式文集比較】

口語式文	讃美歌 聖書 祈祷 讃美歌《埋葬》 頌栄 祝祷または終祷

新式文	賛美歌 聖書 祈祷 主の祈り 賛美歌 《埋骨※注》

⑧ 後日、故人を記念して行われる式

【名称の例】
（口・新）記念式，（新）記念礼拝，記念会，追悼礼拝

【式文集比較】

口語式文	讃美歌 聖書 祈祷 讃美歌 説教または感話 頌栄 祝祷または終祷 思い出 等

新式文	招詞 賛美歌 聖書 祈祷 （説教、感話 故人の思い出 愛唱賛美歌 など） 主の祈り 賛美歌または頌栄 祝福

教会として、どこまでの範囲のかたの葬儀を引き受けるか

A.自教会の会員

B.自教会と特段の関係がある人
　・自教会へ出席している求道者　・過去に担任していた教師　など

C.自教会の会員と特段の関係のある人
　・会員の親族　・会員の被後見人　など

D.同じ教派、または教団の教会の会員

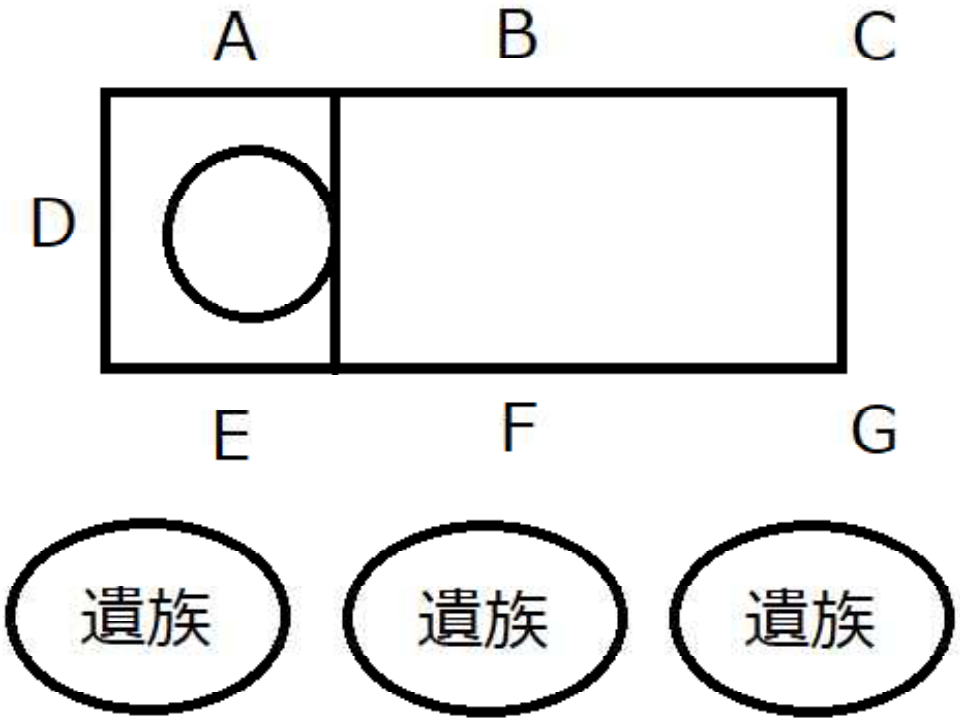
E.自教会または自教会の会員と間接的な関係のある人
　・隣保の住人　・会員の友人や被支援者　・B～Dの関係者　など

F.葬儀を希望するその他の人

▼特に教会員外の葬儀を引き受けるにあたって、併せて決めておきたいこと

・引き受け決定までのプロセス（機械的に決める、予め役員会に諮る、
　牧師が決めて役員会で事後承認、牧師が自由に決める　など）
・教会の諸行事それぞれについて、葬儀とどちらを優先するか
・受付や献花係、清掃などの奉仕者を教会で募るか、遺族や葬儀社に任せるか
・献金、司式者やオルガニスト等の謝儀について、教会員の場合と目安額を変えるか
・葬儀社等から司式者やオルガニストのみの派遣要請があった場合はどう対応するか

◆枕頭の祈り略図



◆葬儀打ち合わせの３区分

(牧師、ご遺族、葬儀社の三者で)
1. 葬式の持ち方、公開範囲、規模、式場、日時、火葬場などを決める

(主に牧師とご遺族の間で)
2. 葬式の中の詳細なプログラムを決める

(主にご遺族と葬儀社の間で)
3. 葬儀のために提供される物品やサービスの内容、またそれに伴う費用などを決める